

朝

十

今昔

昔物

卷之拾
世俗部



りや

あひ

し



今昔物語部十目錄

○世俗傳

- 一 近江國矢馳郡司堂供奉田楽語
- 二 本寺基増依物語付異名語
- 三 助泥法師設破子語
- 四 盛秀法師入唐樓語
- 五 僧通敵上人室語
- 六 銀匠延正有罪入壺語
- 七 豊後講師以謀後鎮西上洛語
- 八 阿蘇史謀盜賊逃難語



今昔物語部十目錄

卯

法華經言（才片）

九 後經所傳碎葦不結

十 金波之別處今有葦葦不碎結

十一 橫河僧碎葦誦經結

Blank area with faint bleed-through text from the reverse side of the page.

今昔物語 倭部十

○世俗傳

一 近江國矢野郡自堂供養田樂諸

今昔比廠之乃而塔之教因府主といふ字生有

説經教化とありたる。このは近江國聖洲郡矢

野之住まる郡司。年ごらけ人よあつらひあり

あり。たけ郡司。いざや而塔よりわ。供養年毎

事あまうつらむと。同い。郡司がいつく。年毎乃

ふらして佛堂はけり。わ。移らる。よ。供養

事んとわいけり。老の身も。い。い。い。

今昔物語 倭部十

つるこの外他まなく儀。程に於ては
 汚穢さればおろしゆて流りり儀と
 して。教田
 かつゆりてこの系中よりゆり。其
 日の本羽
 と津のまじりて乃船とけり。矢
 馳り津
 鞍馬二と正をいひをゆるぐ。ゆ
 りて功徳
 の大なる。舞樂は乃て供養と
 るべし。か
 らど。舞樂に極樂天とのまら
 びなり。されど
 樂人をも呼ぐること。ちやと
 うゆるぐべ
 郡司樂の集が家人よりええゆ
 べき。樂仕ん
 らむといふ中として。教田供養
 志とむべし。

務りたる功徳あるべし。ぞくか
 つつて。亦よつるで
 くに用ゑるべし。郡司より
 ろして。ゆりて。教田の
 ろて。おろし
 ぐりて。牙子二人を具して。而
 格より下て
 津のまじりて。おろし。おろ
 して。ゆり
 ち。ゆりて。已時より。不
 矢馳り。津
 海りて。乃船。鞍馬十餘
 正引て。ゆり
 たり。白將。亦よつる。男
 十餘人。ゆりて。下
 宿。亦よつる。ゆりて。ゆり
 此。ゆりて。ゆりて。ゆりて。

金吾辨言(新編卷一)



けがらふにあらざるものなり。わやしくおしひを
 ぐらひしむきくる馬も素。佐乃は師式人も素
 て相具し。其時白装束し。男共も。件
 馬はひさしくおまて。いゝ思わら。田樂と。股
 うゆいづき。た者のひに。標をりら。笛吹ふた
 拍子を。実机を。し。て。は。ぬ。ぐ。れ。田。樂。と。こ。の。物。三
 つ。物。は。ゆ。き。を。吹。く。そ。う。ふ。つ。と。う。が。う。は。佐。乃
 ら。れ。を。み。ま。い。ら。る。素。あ。ら。わ。ら。ん。と。わ。や。く。な
 ども。同。い。さ。び。田。樂。ぶ。い。の。教。田。が。馬。乃。お。い。さ。ら
 後。あ。り。て。拍。子。と。う。て。あ。ら。わ。ら。ん。と。う。の。後。

いづるの今白のはさちをけい津是
あまおろしあうわいてけ奴魚が中れ具してめ
くば外目よいものぐれりま中うらやんじ
知る人うわさせうや。押入の面をたあたら
ま。袖張もつて教とかくてゆいぐり。段は郡自
が家み逃げくした。門前をまれば百千ぬるぶ人
まごぞりてこれをする。侍まうそだてゆくま
あめけ田樂奴系侍まめ向して。報とらり登乃
ようけとらき。机をけむそ額の上よはのこを
る中とくゆせに腹立こりだるま。郡自が

門はけとて馬よりあひひてとれ。郡自親子出
馬乃りぬたたよららて。あまぐう家の門よい入
ふ。侍まうこまをて家もせゆらせといども。あまか
くけるやとつて耳あし。岡入と。田樂乃奴系
ハ馬乃たあめつあうつ。あまたそく舞てつる。
郡自よりこいて。よく侍まかのまをこつて。報ら
者こ人のよくいさみこらみくう。侍ままいてさ
おろしなぶようぶま。く田樂多ぐららい。ゆま
馬がらきたあま通らう。びつて郡自親子廊より
よをて。いされたゆらして。侍ま

ひらいては田樂の何の辨わかりもなきまじり
那司なすがつく。西塔さいたのまじりまじりはしつ念ねんはよする功德くどく
は樂がくよするもの作つくり終おひるべきを
作つくり。儀師ぎしを樂がく師しとしてしんまをまくくと人ひとの
りままば。あまをまをま作つくつるありと。あままららがらるるににままをま
作つくままののままよよとと。ささてていいはは奴ぢのの田た樂がく師し樂がくとと心こころ
わわららららとと知しくく。ゆゆららととささををええどどととれれどど。ひひくく
とといいぶぶとと人ひとももああららととれればば。形かたちののおおととくく儀ぎ奉ほうりり
ゆゆららととゆゆららととつつとと小こ僧そうとともも中ちゆうににてて。田た樂がくのの
奉ほうととくくれれいいどどよよららににららととりりとといいらら。賤せん乃なり

因いん舎しゃ人ひとのの心こころををららににああららししめめるるのの知しららぬぬののままよよららししめめるる
けけ那な司すののまま下げたたらら奴ぢかかとと。ままとと人ひとももああららとといいららししめめるる
いいららととああららししめめるる。いいららとといいららししめめるるとと也なり

二 本ほん寺てら基もと増ぞう依よ物ぶつ智ち付つけ異い名な名な諸しよ

今いまののひひりり一いち條じょう接せつ段だん殿でん 實經公じつけいこう九く大だい臣しん從じゆう一いち位いのの位い園えん白はくのの道だう家か公こう男なん 位いのの位いのの位い

あり桃園うづものの人ひとのの世よをを寺てらたたらら。ままとといいららししめめるるままとといいららししめめるる
經きやう抄しやうととああららししめめるる。山さん三さん井せい寺てら太たい長ちやうのの中ちゆうににおおとと
たたららししめめるる。ままとといいららししめめるる。ままとといいららししめめるる
面めん清せい後ご經きやう而にてて。僧そう共ぎ居いををららししめめるる。ままとといいららししめめるる
ととららししめめるる。ままとといいららししめめるる。ままとといいららししめめるる

殿乃本立の異名に似せしむる故本立に
基増といふ傳はて。奈良は師りものいつい
まゝのまふ。こゝらとせしむるもいつい
あるやまゝいふれ。仲算即つゝはては
阿比羅とす。あつらひは清光とび小寺の小僧とこそ
どぶらとされといひ。中々ある僧どもおをくれ
らととんと後いふ。橋政と知ふことなほま
まの何のまをいふとせしむるも同多しなれば。僧共省
のまゝいふに。殿これの仲算がかくいふをこそ。けさ
やくとくも。基増がにおしていついふは。ゆきりとも

けさ。まのあつらひは傳はれ。僧どもは後いふ。
そのけさの後の異名と小寺の傳とよむ。けさの
基増の本立の傳はる。いふ。お。ま。れ。基。増。とい
ひ。と。かん。が。ら。け。さ。ら。と。也。

三 助泥法師被破子語

今にしりて禅林寺深禅僧正 按深禅。當作深覺。○系
圖曰深覺。法務大僧正

號禅林寺○九條右大臣藤原師輔男 やうじんせうしけら。これに九条殿

乃清子なり。おんごれさけら。なり。其の才子徳大

ちの賢尋傳教。このけいも。つゝ。東寺の入

寺のまゝと稱堂しける也。大僧子なり。入給は

師の傍に破子三十荷つらぐりねさまそおくらんと
さいまいくらには。雑ま林の上を作る助泥といふ傍有り
しとあらくあらくお料は破子三十荷入ぎさり。
人ぐいしふとさのさしましば。助泥十八人とすす
くと各一荷づ込あてて借さしじ。傍心今十
五荷の破子の借れぬあてみさらとのさら助泥一一
さらの助泥が借えてい破子借よ。皆も借えるとあ
まと借さと借入べ米と借一借ぬげ米と借
助泥が借んと借れ傍心といふ様いささりあり
ゆくとのさらのさら。助泥くさらの事とさら

貧窮うや借ぎさといてさらぬ。其の向みゆて人と
み借くら。すまあれ破子のらまりぬ。助泥が破子
の借ぎさと借入べ米と借一借ぬげ米と借
はあといふのさら助泥借のくらと上て扇と
いさしてけくやついて志さらぐさらてあまりくり。
傍心見まいて破子のらまりぬ。つみく志さり
がさらて来らると空いくら。助泥借のくらとさらくかい
こまりてあまりくり。傍心何どと向まりぬ。其の事さら借
破子のらまりぬ。借れぬと借れぬと借れぬと同様
つみく志さりして。今まりの入物の不借れる事

中流今又ついで同夫人の夢をまねらるるまで。その
ねごと仕ねと中流僧正のよるる入るるうか。
僧正申さるやあやふも出来さん。何と云ひて
りほ事ををびまらるぞと志らうまひくれぬ。あやふ
くうゆしてあげ去らり。そのころ前後お遠のり
をば。脚流が破子といふうらありとせん。諸
はさえさるるや

四 盛秀は師入唐櫛諾

一本作感秀。一本作成秀。未知何是。

今いむくわら長受の家の。祇園乃別当盛秀
悲じてせむいさる。あやふた守かへ出ら同よ。盛秀

入らうて受銀が妻と戯を長らるや。さ守くら
くうたれはる女房し下女しをるわら。乳色を
もい守らひてかのみさあふ事われはとどに奥
へくうるふ唐櫛ノ鎌をけらう定く盛秀と
はゆよ入らるさんとをゆく長しき侍一人を呼
ては唐櫛祇園のよこをけりて誦經やて本は
文を書きくつてまはは侍下人よもてをて祇園
ゆを侍もぬらむらけりてけきバ別当の他
あやふれらうまづくはぐりてついでに彼方け方ぬ
づひことるぬらむらぬらむらとよけの侍祇園

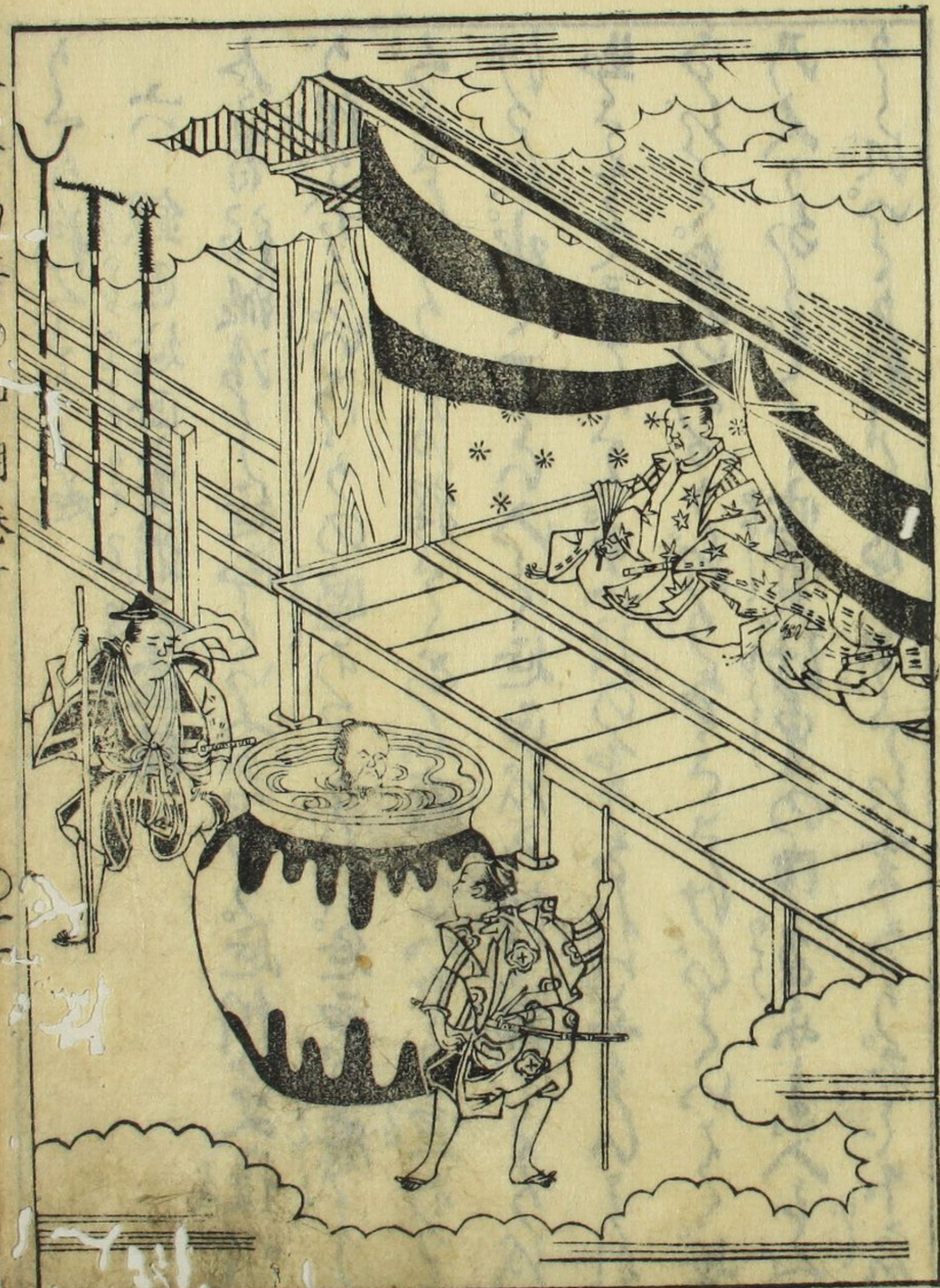
いづくかゝるは。櫛をのみきり。髪を剃り。何れも。別當のいづくの。は。りて。さ。い。ひ。さ。ふ。母。唐櫛の中。み。を。さ。く。い。じ。り。も。あ。ら。ま。り。そ。あ。ぢ。い。そ。ふ。い。し。き。と。い。ふ。僧。は。誦。經。乃。使。と。それ。を。ま。て。せ。ら。る。と。あ。や。ま。あ。ぢ。い。ひ。く。て。お。づ。ら。の。み。わ。く。糸。は。お。づ。く。唐櫛の。ら。ふ。お。わ。くら。ふ。別當。く。い。と。い。し。り。出。し。り。僧。は。い。こ。れ。と。い。ふ。目。口。は。ゆ。が。め。く。ま。ま。ば。誦。經。乃。使。と。遂。く。り。り。り。別當。の。唐櫛。より。出。く。奥。へ。け。り。と。か。く。ま。ら。る。の。ら。は。い。し。り。と。関。つ。と。ら。く。髪。い。あ。り

とみん。く。ら。は。は。い。と。え。と。ら。と。也

五 僧通殿上人室諸

今。い。ひ。り。名。の。関。め。れ。ど。り。で。や。と。事。書。あ。る。殿。と。人。の。家。い。と。の。ら。中。ん。ご。と。あ。れ。た。僧。悲。び。て。あ。い。く。ら。孤。男。と。い。ひ。て。ま。ら。る。と。い。ふ。三月。廿。日。あ。ま。ら。と。い。は。其。人。内。女。と。あ。り。ら。る。関。り。う。の。僧。其。家。よ。来。り。て。ま。の。女。房。と。い。ひ。ら。ら。る。が。衣。袷。ぬ。ぎ。て。あ。り。つ。た。を。い。と。と。女。房。あ。ら。く。衣。袷。より。も。を。ま。ら。り。志。ら。る。と。い。ふ。あ。い。男。が。方。より。人。こ。ふ。も。い。ふ。さ。して。遊。よ。ゆ。く。あ。り。鳥。帽子。持。衣。と。つ。と。を。と。い。つ。よ。女。房。上。行。み。り。を

ころお衣とてなり。烏帽子とてきよも入ては、
 ころがて人こやわとてころめ。使はるお衣は、
 ひきまゝふ。烏帽子のありて將衣いたく。さしを
 ざら傍衣あり。人けふる目くらぐく。ぬえぐく。公
 地して衣は、ころんちぐく。使はる。入く。妻がゆへん人
 ころとてくちかき
 こはふふふの卯月の一回のゆだたよきつるころめぐく
 と書く。やがて其妻と出く。ころの女房傍衣とて
 うきまぎく。ころたよきりだたて。お衣とてらぐく
 ころのちん。びる。やう。はさく。知い。ころや。



うらつたふらつた也

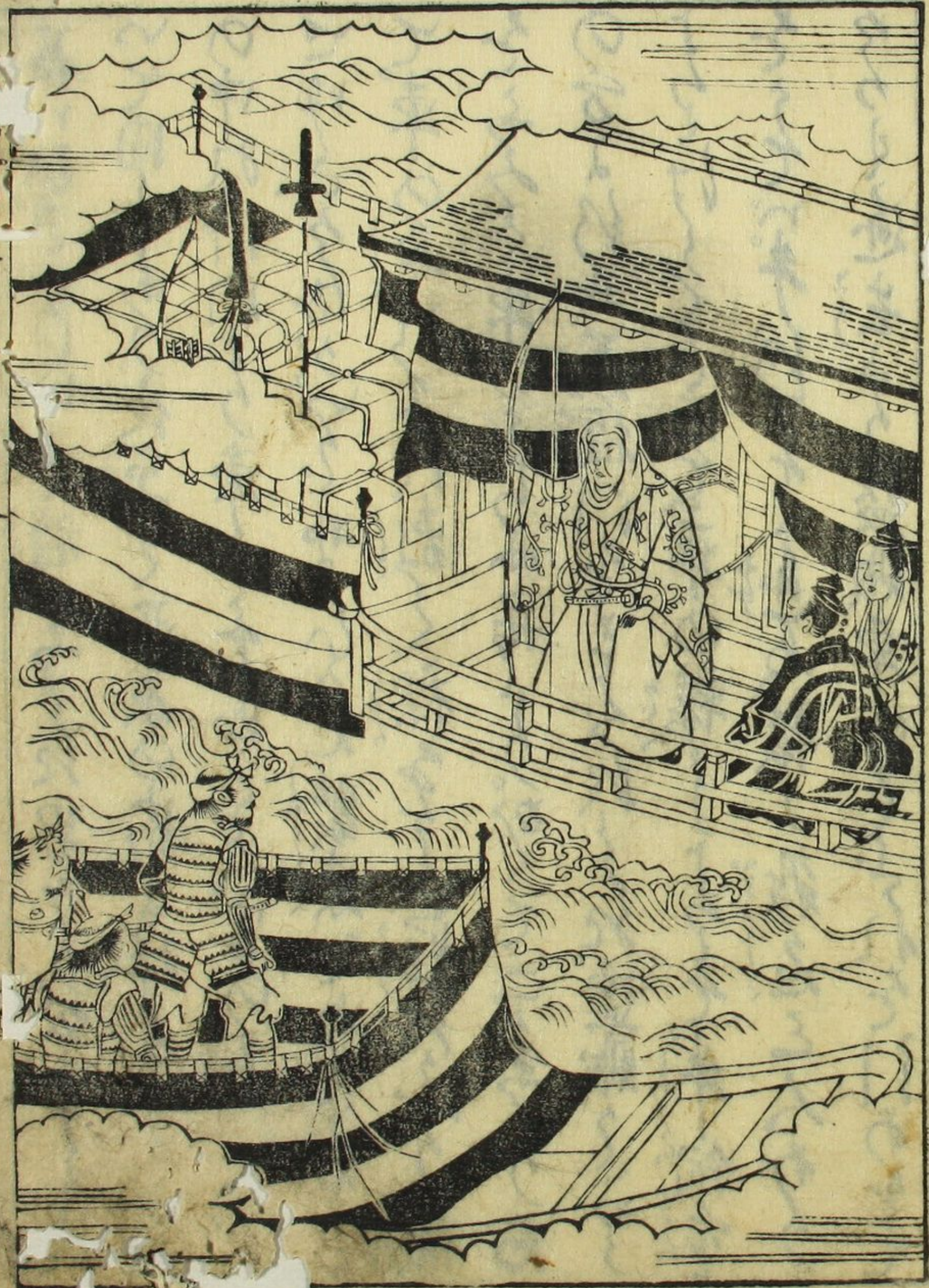
六 銀匠延正者罪入壺諾

今昔記辨治延正中より考あり延利が又惟明
が禮交かりいけりの過ありて延正は廳
くごされり。まは移りては廳より大なる壺あり
けり。水と一入りて延正は入けり。頭より延
正を移りて移れり。十一月の事なれり。あつたれ
まは移りて移りて延正は移りて移りて移りて
乃人ありて延正は移りて移りて移りて移りて
うらつたふらつた也。延正は移りて移りて移りて

して考へまはかりたり。院の考へて移りて移りて
延正は移りて移りて延正は移りて移りて延正は
こゝれして延正は移りて移りて延正は移りて
延正は移りて延正は移りて延正は移りて延正は
延正は移りて延正は移りて延正は移りて延正は
延正は移りて延正は移りて延正は移りて延正は
延正は移りて延正は移りて延正は移りて延正は
延正は移りて延正は移りて延正は移りて延正は

七 豊後謀師以謀後法皇上洛諾

今昔記辨治延正中より考あり延利が又惟明
が禮交かりいけりの過ありて延正は廳
くごされり。まは移りては廳より大なる壺あり
けり。水と一入りて延正は入けり。頭より延
正を移りて移れり。十一月の事なれり。あつたれ
まは移りて移りて延正は移りて移りて移りて
乃人ありて延正は移りて移りて移りて移りて
うらつたふらつた也。延正は移りて移りて移りて



古今物語の巻第十

疾速よとておとせしとて清くしてのさうれば後師
 ハ虎口このぐままら。其時とき後師ごし後ごももはは見み
 入いよよ。己おのれ考かん海賊かいぞく物ものとと執とりりかかとと自じ認にんめめるる
 移うつりりままののののりり。ススのの因いんのの後ご師しよよああててばば夜よ
 いいままららんんとといいふふももいいててららららうう。道みちののままをを
 人ひとよよめめららけけるるふふ。仔細しじゆ新あらたままのの意いととららままりりんんとと
 せせししららららうう。いい仔細しじゆままままららううららぬぬちちららとと
 ちちせせららららううととままららううららぬぬららううととせせ
 ハ 阿蘇あそ史し謀ぼう盜賊とうぞく遁のん令れい語ご
 今いまいいひひらら阿蘇あそ郡ぐんよよ何なに某ごととといいふふ史しありあり
 阿蘇郡あそぐん在あ肥ひ後ご國くに

長いほどに、^{たゞ}膽いふくた男なり公事よは
つてゆゑ、^まちや。夜更く西条の家は、^い隊りして東
の中は清門より車めま出く。大宮の下に、^いは
てゆゑ、^いちやぐ。いづれ、^いは装束とぬき、^いちや
て。車の、^いちや下に敷く。裸を、^いちや冠ひ、^いちや
を、^いちやみく車の、^いちやみ、^いちやて。二、^いちやより
の方より、^いちや美福門を、^いちやと、^いちや盗賊、^いちや
より、^いちやけ、^いちやと出で。車の、^いちや轆、^いちやより、^いちや牛飼、^いちや
を、^いちやてい。牛、^いちやひ、^いちやて。牛、^いちや轆、^いちや雑、^いちや色、^いちや三人、^いちや
より、^いちや逃、^いちや去、^いちやり。盗賊、^いちや車の、^いちやと、^いちやそれを、^いちや引、^いちやを、^いちや

つらふ。使、^いちやとて、^いちや居、^いちやれば、^いちや是、^いちやいつ、^いちやあ、^いちやと、^いちや人、^いちやが、^いちや
を、^いちやみる、^いちやぬ、^いちや思、^いちやう、^いちやて。東、^いちやと、^いちやあ、^いちやと、^いちや君、^いちやを、^いちや進、^いちやの、^いちや宮、^いちやを、^いちや
將、^いちや束、^いちやと、^いちやお、^いちやつ、^いちやち、^いちやら、^いちやと、^いちや君、^いちやを、^いちやれば、^いちや盗、^いちや人、^いちやと、^いちやい、^いちやて、^いちや
去、^いちやり。その、^いちやら、^いちや使、^いちや牛、^いちや飼、^いちやを、^いちや下、^いちやと、^いちや呼、^いちやを、^いちやて。我、^いちや家
み、^いちや帰、^いちやして、^いちやび、^いちやと、^いちやあ、^いちやら、^いちやれば、^いちや事、^いちやに、^いちやめ、^いちやお、^いちや内、^いちやの、^いちや者
ども、^いちやひ、^いちやて、^いちや將、^いちや束、^いちやと、^いちや脱、^いちやで、^いちやく、^いちやし、^いちやを、^いちやま、^いちやつ、^いちやい、^いちやを、^いちやと、^いちや思
し、^いちやら、^いちやぬ、^いちやせ、^いちやよ、^いちやの、^いちやひ、^いちやら、^いちやあ、^いちやら、^いちやい、^いちやと、^いちやう、^いちやら、^いちや事、^いちや也。
盗、^いちや人、^いちやと、^いちやぬ、^いちやら、^いちやら、^いちやあ、^いちやと、^いちやわ、^いちやら、^いちやけ、^いちやら、^いちやい、^いちやと、^いちやい、^いちやら、^いちや事、^いちや也。
い、^いちやら、^いちやい、^いちやら、^いちや事、^いちや也。

九 後経西常醉草死語

和歌卷十

今に... 大長公... 沙徒... 社内の友... 僧... 才子僧... 其由... 料... 絹布米...

東大寺... 僧... 平草... 焼漬... 何方... 煮... 頭... 吾の知識...

吾の知識...

...

病に罹つて念するやうと尋ね宿病とは
つふあへぬも。物よりいふも中より僧
ども。ふもあつたはれごとくうらひくる。日病
の僧殿より申しておきしべ。致り申し
事くすこのころにて。病後復さる後。母の
申して平葺狐の念するごとく伺きしべ。傍
くらは。おやうらうらやうらき身は焼く。死し作しりな
ハ大踏おほよこそして作らんと。さうばいさうれしを
ゆる。頃日僧何某が葺の毒ありありと死し作し
くらは。葺料むしをぬつて死し作しりなむらうらうら。

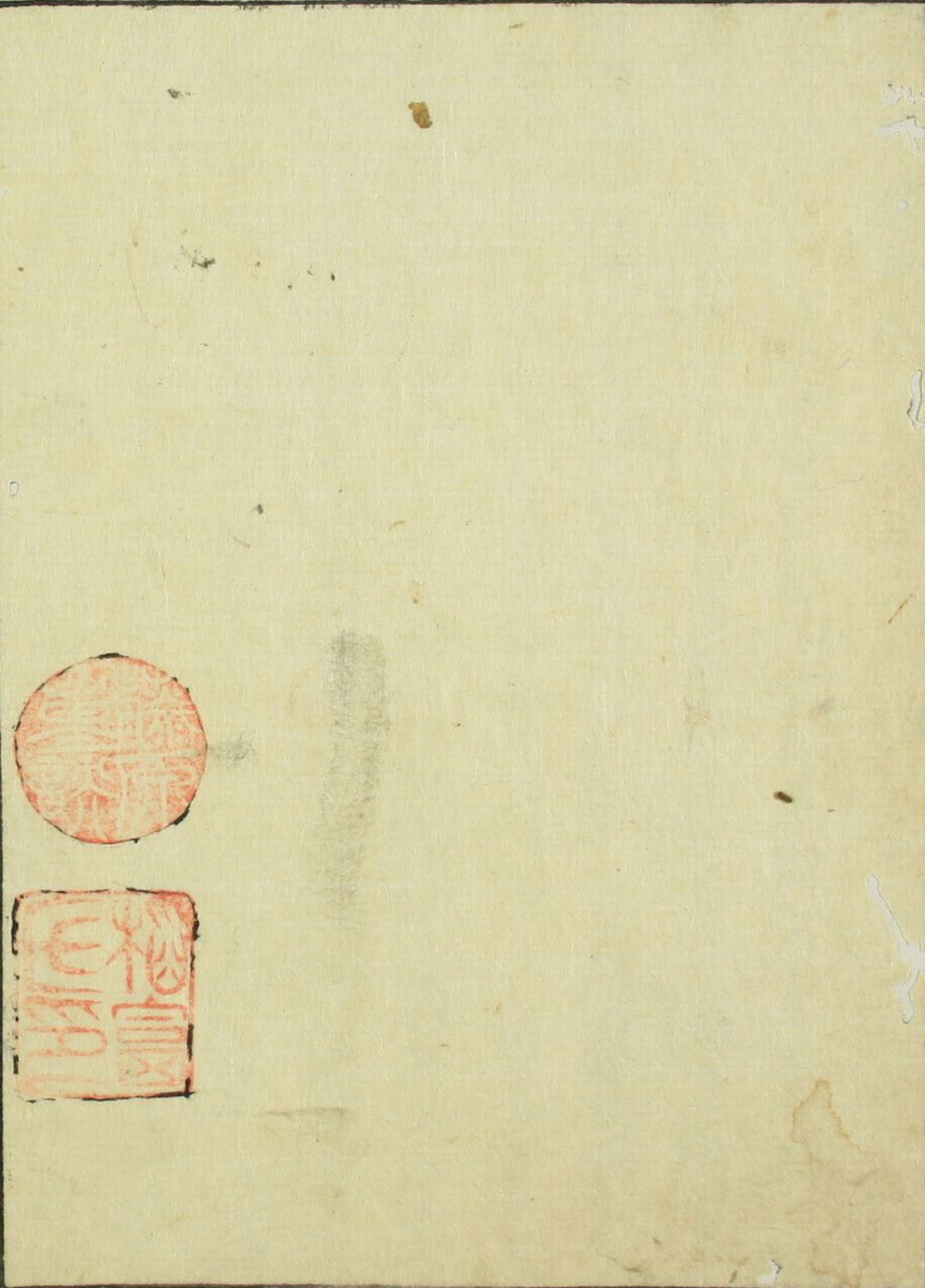
あつたうらうらやうらて。傍ぐと平葺狐に
死し作しりなむらうらき葺料むしとゆふ。むらうらと思ひ
て。念し作らんと。死し作しりなむらうら。作らんと
殿ものより僧に申す。このころにて。笑わらひをまひ
あつたあつたがうらうらうら也。

十 金澤と別當念毒葺不詳語

今いひし念毒との別當とて申すもむらうら。
いふい別當といふ一福と申すも。近きいふ
事たり。年より一福のむらうら別當と申す。
萬の僧ありて。別當と申す。我別當といふと。

今昔物語(和歌集)

卷一



上

下



大家集

卷一